

---

# アルカナスパイラル～天瀬藍思編～

影輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルカナスパイラル〜天瀬藍思編〜

### 【Nコード】

N7882J

### 【作者名】

影輝

### 【あらすじ】

アルカナスパイラルの天瀬藍思の話です。序章を読んでから読むことを強く勧めます。

## 1、恋人

恋人

私は人間。

人間だから恋をする。

私は動物。

動物だから好きになる。

たとえば、それが届くことのない意味のない代物だったとしても、私は愚かにそれを望<sup>オモ</sup>う。

・  
・  
・

「…………ふう、何でこう…………零斗は鈍感なのかな…………？」

変なところは敏感な癖に、何でこういう恋愛方面には鈍感なのよ…………。

「　藍思ー！ご飯できたわよー！」

「分かったー！今行くー！」

・

私は頭で考えていたことを頭の端っこにおいて、下に降りていった。

・ ・

「……始まった……。ごめんなさい、藍思。私ではあなた達を助  
けることができないの。許して……」

## 2、主な登場人物

アマセ アイシ  
天瀬藍思

この話の主演。『V.I』の刻印を持つ。ご存知の通りの変態。最近  
は痴女にまで発展するような勢いで変態度が成長している。

シタカミ レイト  
下上零斗

我等が主人公。今回もツツコミに徹している。鈍感も健在。

カロウド  
屍櫃

みんなご存知の死神。不可解。

オノツカリク  
小野塚陸

藍思や零斗の親友。今回は出番少なめ。

藍思のお母さん

外見年齢20代前半の物凄く綺麗なお方。零斗に『おばさん』と呼  
ばれるのを若干嫌がっている。

藍思のお父さん

仕事であちこちの国を行ったり来たりしている物凄く忙しい人。旅  
行が趣味で休日も世界中を旅しているので、家で見掛けるのは極稀  
である。

ヤマナシ  
月見里

今回の敵。桜花十聖第参番の実力者。何か耀と名字が似ているとか  
言われる。とてつもなく美しいらしい。

### 3、時は夏……………（前書き）

更新が遅いうえに、短くてすみません……………。

### 3、時は夏……

「ちっ……また雨か……」

ザーザーと煩わしい雨音が放課後の静かな教室に響き渡る。全く、煩いっただらありやしない。これで3日連続の雨模様だ。それもその筈、今は6月中旬。梅雨真っ盛りの時期だ。昔風に言うなら水無月だ。全く、どこら辺が水がないのか知りたいわ、ボケ。

「……くだらないことばかり考えてないで、さっさと帰るとするかな」

今現在、寂しいことに教室には俺以外誰一人としていない。雨音以外には何の音もしない。……なんか、取り残された気分になるな……。

「はろゝ、零斗」

「………煩い」

「ひ、酷い！私のことが嫌いなのね！」

「………ああ嫌いだ」

「ッ！？私とは遊びだったのね！？頭の中で私のことを馬鹿にしていたのね！？」

「うるせえよ！屍櫃！藍思の声で変なことを言うんじゃないよ！気色悪いんだよ！」

「……フツ、相変わらずだな、下上よ」

「な、何だよ……急に懐かしむような感じで……。放課後になるまで同じ教室にいただろ……？」

「そんなことは知っている。何となくそのような台詞を言ってみたくなっただけだ」

屍櫃の言葉に若干違和感を感じたが、屍櫃の態度がいつも通り変だったので、それは俺の勘違いのようだ。

「……そうかい。お前も相変わらず謎だな」

「フツ……褒めても何も出んぞ？」

「いや、褒めてねえーし」

「フツ、俺にとって『謎』というのは最上級の褒め言葉だ」

「……そうかよ」

相変わらずわけの分からない野郎だな。

「時に下上」

「…なんだ？」

「天瀬の行方を知らないか？」



「藍思の行方？知らねーよ。家にも帰ったんじゃねーの？」

藍思は帰宅部だし、この雨でわざわざ寄り道なんかしないだろうし。

「そうか。…ならば仕方がないな……………」

「つーか屍櫃。藍思になんか用でもあるのか？」

「別に大した用ではあらんよ。…ただ、早くしないと色々都合がつかんのでな」

「ふーん。また何か企んでるのか？」

「フツ、さあな。……おっと、もうこんな時間か。…では、下上。俺は貴様と違って忙しい身なのでな。悪いが先に失礼させてもらう。去らばだ！」

と、言いたいことだけ言って若干暗くなってきた教室（電気をつけていないので、結構暗い）から去っていった。

「……………さて、俺も帰るかな」

俺は誰もいない教室を後にした。

・  
・  
・

「あつ、そついや傘持ってきてなかったな……………」

仕方なく雨に濡れるの覚悟で急いで帰宅した。

#### 4、予感（前書き）

今回も短いです。

#### 4、予感

ピンポーン

藍思の家のインターホンを鳴らす。もう藍思を起こしに行くことが当たり前のようになっている。……まあ、週五だし……そうならない方がおかしいな。

シーン。

「あれ？もしかしておばさんいないのか？」

ピンポーン

もう一度インターホンを鳴らす。

シーン。

やはり反応がない。どうやらないようだ。仕方ない、藍思の携帯に電話するか。……まあ、出ないと思うけど……。

ブルルルル、ブルルルル

「駄目だ。出ない………」

だが、どうやら電源を切っていないところを見ると、やはり寝ているようだ。

「まあ、起こす相手が入れない家にいる限り起こす手段はないな。」

と、いうわけですまない、藍思」

俺はお前を起こさずに学校へ行く！

俺はそう決心し、藍思を放置することにした。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

・

## キンコンカンコン

「はい！皆席着いてー！」

現川先生が教室に入ってきた。

皆先生の言うことを素直に聞き、席に着いた。

「えーと、天瀬さんはとても大事な用事があるということなので、今日は休みです」

ふーん、今日藍思は休みだったのか。だから家にいなかったんだな。全く、学校を休む程の用があったなら昨日の内に言っておいてくれてもよかったのに。

・  
・  
・

「……………フム、これは何かありそうだな。調べてみるか」

屍櫃はそう呟いた。

・ ・ ・

〔放課後〕

「下上、今夜7時に学校近くの公園に来てくれ」

「何だ？屍櫃。何かあったのか？」

何時になく真剣な顔つきで屍櫃が話しかけてきた。

「分からん。…ただ、嫌な予感がするのだ。杞憂であればよいがな」

屍櫃がそこまで言うとは、余程のことが起きているかもしれないな。

「よし、分かった。7時に学校近くの人夢公園<sup>ヒトユメ</sup>に行けばいいんだな？」

「ああ、そうだ。では、予定の時間にまた会おう」

そう言い残して、屍櫃は消え去った。

「さて、美空の晩飯をさつさと準備して出かけるとするか」

今日はカレーにするか。どうやら作って寝かせる時間がとれそうだからな。

## 5、図書館地下

〔夜7時〕

「屍櫃はまだ来ていないのか……？」

言われた時間に人夢公園に来たが、呼び出した張本人の姿はない。  
……もしかして、日時を間違えたか？

「……いや、でも………」

今日の7時に人夢公園って確かに聞いたんだけどな……。

「何を一人でブツブツと呟いているのだ？」

「うおっ！……屍櫃か……。で、何のようだ？こんな時間に呼び出した挙げ句、待たせやがって………」

「それについてはすまないと思っている。しかし、俺にも色々準備というものがあるのだ」

「準備ねえ………」

こいつがいう準備ってのは、大概危険な方向のものなんだよなあ……。

「で、俺は何をすればいいんだ？」

「なあと、簡単なことだ。これから俺と学園の図書館地下十階

に行ってもらっ」

「図書館の地下十階？何でまたそんな所に……？」

あの大図書館に忍び込んで何を調べるつもりだ？

「フッ、来れば分かる」

「……分かった。ついてってやる」

「では、これを受け取れ」

屍櫃は細長い包みを渡してきた。……一体今までこれをどう隠し持っていたんだ……？

「これは……？」

「護身用の武器だ。図書館の地下四階以降は警備システムが彷徨い  
ているからな」

「へえ」

と、生返事をしながら包みをほどいて中身を確認する。……そこには、  
一本の刀が……。

「言っておくがそれは模造オモチャではない。扱いには十分気を付けてくれ」

「あ、ああ………」

つくづく思うが、お前は一体何者なんだよ………？



・  
・  
・  
・  
・  
・

「図書館地下三階」

「ふう、ここまではどうにか忍び込めたな」

図書館内の闇は濃く、屍櫃が持ってきたカンテラ（何故か懐中電灯ではなかったが）がなければ進むことも儘ならなかっただろう。それくらい暗かった。

「では、これより地下四階に潜入するぞ」

「潜入つつあって、どうやって下に行くんだ？地下四階に行く階段の扉は30個の鍵でがんにがらめに閉じられているんだぞ」

しかも決められた順番に外さないと外れないようになっていらい。……嚴重過ぎだよなあ。

「フッ、下上よ。この俺がわざわざ正攻法で潜入すると思うか？」

「……………」

「しないよなあ……………」

「フッ、そういうことだ」

屍櫃は何故か自慢気にそう言った。

「……で、どうやって下の階に行くんだ？」

「なあに、簡単なことだ。こうすればいい」

屍櫃は近くにあった本棚のある一冊の本の上を持ち、取り出した。  
いや、正確には途中で引っ掛かった。

カチッ

という音が聞こえ、その本棚が二つに割れて階段が現れた。

「俺が秘密裏に造った隠し階段だ。これで四階まで行ける」

「造ったって……」

相変わらずでたらめな奴だな……。

「褒めても何も出んぞ？」

「……………分かってるよ」

「フン、ではついてこい」

俺は屍櫃の後を追って階段を降りた。

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

「随分地下四階は明るいんだな」

地下四階は随分と明るかった。かなり暗かった地下三階とは大違いだ。

「当然だ。ここの警備システムはこの蛍光灯から発せられる光で歩いているからな」

「つまり、この蛍光灯がある限り永久に歩き続けることができるって？ 屍櫃、警備システムが『歩く』ってどういうことだ？」

「フツ、百聞は一見にしかずだ。あれを見る」

屍櫃が指を差した方を見ると、何かゴーレムのようなものがこっちに向かって歩いてきている。

「あれが警備システム、その名も『ゴーレム』だ」

そのままだなあ、オイ！

「で、そのゴーレムが真っ直ぐこっちに向かって来ているんだが……」

「フム、どうやら気付かれたらしい。このまま大人しくしていれば確実に始末されるな。恐らく逃げられもせんだろう」

「じゃあ、どうすんだよ！」

「なあに、簡単なことだ。こうすればいい。散！」

屍櫃がそう言つと、20メートル先のゴーレムが真つ二つになった。

「おい屍櫃……お前今何をした？………」

「フツ、ただ神速の居合いをやつただけだ」

「……………そうか……………」

最早突つ込む気力すらなくなっていた。

「貴様にも戦つてもらつぞ。そのために刀を渡したのだからな」

「マジかよ……………。つか俺日本刀なんて扱えないけど……………」

まあ、日本刀を扱う人間なんて見かけないがな。

「心配要らんよ。そこは設定を変えればいい話だ」

「設定つて何だよ！？メタな話すんな！」

「フツ、気にするな。ただの戯れ言だ」

そう言い残し、屍櫃は1人歩き出した。

「おい！待てよ！お前がいなきゃ道が分からんだろうが」

急いで先を歩いている屍櫃を追いかけた。

……で、結局のところどっちなんだ……？

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・

「ここが地下十階への扉だ」

「……ハア、ハア……やっとなつたのか……」

長かった。本当に長かった。

地下四階ではゴーレムに囲まれ、

地下五階では巨大な食人植物に食われそうになり、

地下六階ではレーザー光線に焼かれそうになり、

地下七階では超重力発生装置で押し潰されそうになり、

地下八階では床・壁・天井に張り巡らされた線上を円状の刃が駆け

巡り、切り刻まれそうになり、

地下九階では重火器で死にかけたり……

とにかく、もう二度とかんな経験したくない……。

つか、ここ本当に図書館か？

「よし、では開けるぞ」

屍櫃が扉を開ける。

これで漸く目的地に着いたわけだ。

「じ、これは……」

開いた扉の先に見えた光景は、数十、数百という数のモニターが辺り一面に広がっているというものだった。  
今までの階は図書館らしさを失いながらもちゃんと本はあった。しかし、ここには本というものが一切なかった。最早、図書館とは別物であった。

「館長、いたら返事をしてくれ」

屍櫃がそう言う。……館長？

「あれ？何の用？屍櫃……それに零斗君？」

「あ、あなたは……綾女さん！？」

地下十階の奥から出てきたのは、前不吉な女に呼び出された時に出逢った女性……そう、花咲綾女さんだった。

「久しぶりね、零斗君」

「ええ、お久しぶりです、綾女さん」

軽く挨拶を交わす。

……ってゆーか何故ここに綾女さんが！？そして何故に白衣！？

「下上に花咲館長、挨拶はそれぐらいにしてくれ。用をできるだけ早めに済ませたいからな」

屍櫃は綾女さんの名字に館長をつけて呼んだ。

……ということは、この大図書館のいわば主だということだ。

マジで？俺より二三歳上なだけにしか見えないのに……………？

「館長は要らないわよ。昔通り花咲でいいわ」

「フツ、了承した。では花咲、昨日の夕方から今日の朝方までの天瀬家周辺の記録を見せてくれ」

天瀬家って……………藍思の家じゃねえか！

「分かったわ。じゃ、ついてきて」

綾女さんはクルツと振り返り、そのまま歩いていく。  
俺達はその後についていった。

……………関係のない話だが、綾女さんの白衣の背中部分に書かれている『玖』の文字の意味は何なんだろう……………？

## 6、急げ！

「花咲、今のところを巻き戻した」

「OK」

「……………」

……………何だ？この地味な作業？

屍櫃と綾女さんがモニターを見ながら何かしているところを見て思った率直な感想だ。

暇だからこの一回も使った記憶がない刀でも観察

「見つかったぞ！」

するかなあと思った矢先に屍櫃からお呼びがかかる。

……………相変わらずタイミングが悪い奴だ。

「それはわざとだ。それに今回は時間があまりないようなのでな、貴様の暇潰しになど付き合っている暇はないのだ」

「……………そうかよ。で、何が見つかったんだ？」

「これを見れば分かる」

そうして屍櫃は身体をモニターの方に向ける。俺もモニターに近付き、映っている映像を見る。

「これは……………藍思ん家前の道路？」



「そうだ。そしてこの映像は今日の午前5時ぐらいの時の映像だ」

「ふーん……………って！何で今日の午前5時ぐらいの時の藍思宅前の映像がここにあんだよ！？」

「ここの大図書館は町中につけられた監視カメラの映像が集まる場所だからな。天瀬家周辺の映像があっても不思議ではあるまい」

「町中につけられた監視カメラって……………」

それはいくらなんでも不味いんじゃない……………。

「無論大丈夫に決まっておろう。プライベートの場を盗撮しているわけではないのだからな」

「違うわっ！そんなことが問題なんじゃなくて、問題はそれを地方に国に知らせないで仕掛ける方が問題だって言ってるんだ「問題ならないわよ」……………はい？」

「だって、国の許可なら出ているもの」

綾女さんは俺の台詞の途中に言い、俺が黙ってから追加した。

……………つか、この人は一体何者……………？

「そんな下らんことを気にしている場合ではない。……………ほら、始まったぞ」

屍櫃が口を挟んだので、渋々視線をモニターに戻す。……………ん？黒い車が藍思宅の前に停まって、中から黒ずくめの奴等が出てきて、

藍思宅に押し掛けたな。……あつ！藍思とおばさんが無理矢理に車に乗せられてどっかに行っちゃった！

「……………屍櫃、一体これは……………？」

「どうやらこの連中に天瀬親子が連れ去られたようだな」

「そんなこと視れば分かる！一体この連中は誰なんだ！？」

「ここら辺一体で色々やっている犯罪集団よ」

俺の疑問は綾女さんによって解かれる。

「犯罪集団って……………」

自分でも息を飲むのが分かる。

何故そんな危険な連中と天瀬家が……………？

「それは分かん。しかしこのままにしておく和不味いことになることは確かだ」

「そうね…………。確かにこのままだと天瀬さんや藍思ちゃんに被害が及ぶのは確実……………」

綾女さんの顔が哀しそうに歪む。それもその筈、綾女さんは口に出しては言っていないが、このままでは天瀬親子が何処かしらに売られるということが分かっているからだ。  
勿論、そんなこと赦される筈がない！

「さて、どうするのだ、下上？」

「愚問だ！連中から天瀬親子を助けるに決まってる！」

「フツ……それでこそ我が友だ！花咲、連中のアジトの場所は何処だ？」

「ここから北東の方向にある良山ウシトラサンよ」

「あそこか……少し遠いな……。急ぐぞ、下上」

「おう！……また縁があつたら逢いましょう、綾女さん！」

「……ええ、必ず逢いましょう」

俺達は急いで来た道に戻った。

・  
・  
・

「……ここら辺で色々やっている犯罪集団ね……。そんなのが本当にいたらもうとくに捕まえているわよ……。ここがあるんだから……」

……まあ、どうでもいいか。私の仕事は終わったし、後はあなたの好きなようにしていいわよ、カクヤ輝夜。

・  
・  
・

「 艮山は遠いが、わざわざバイクを取りに戻る暇はない。このまま走って行くぞ! 」

「 OK、分かった 」

屍櫃と並んで走る。  
するとそこに

「 あれ? お前等、何やってんだ? 」

何故か龍牙先輩がいた。

「 龍牙先輩こそ何しているんですか? 」

走る速度を緩め、話す。

「 俺か? 俺は生徒会の仕事だ。会長ともなると色々忙しいんだぜ。  
…… っていうか、俺の質問に答えろよ 」

「 すいません、実は 」

「 白黒、悪いが頼みがある 」

俺の台詞に被りながら屍櫃が言う。

「 …… こいつ等人の台詞に被るのが好きだなあ …… 」。

「 屍櫃か。別に構わんよ。      ただし、理由<sup>ワケ</sup>を聞かせてくれるなら  
な 」

「フツ、いいだろう。まず、貴様の家の車を呼んでくれ。そこで理由を話す」

「それなら問題ない。もう既に校門前に帰宅するために迎えを呼んでいるからな」

「そうか。ならば運転手に艮山に向かうように言ってくれ」

「OK、いいぜ。じゃ、校門まで急ごうぜ」

龍牙先輩の走る速度が上がる。俺達もそれにつれてスピードを上げる。

そして、龍牙先輩の車に乗り込んだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふ〜ん。なるほどね。随分と面白そうなことになってんじゃねえか」

龍牙先輩に逢うまでにあった出来事を説明したら、龍牙先輩はそう呟いた。

「……………決めた！」

「き、決めたって……………一体何をですか……………？」

十中八九あれだろうが一応訊く。

「決まってんじゃないか。俺もその戦争に参加するんだよ」

「……やっぱり……。」

「フッ……やはり参加するのか、白黒よ」

「たりめーだ。こんな面白そうなことに参加しなくてどうすんだよ」

「いや、普通は参加したがると思います……。」

「いいだろう。勝手についてくるがよい。ただし、貴様の身に何が起ころうと責任は問わんぞ」

「構わねえよ。我が儘言ってるのはこっちだからな。おい！あれをここに持ってこい」

「お待たせ致しました」

「……………」

早ッ！！用件を言った瞬間にメイドさんがアタッシュケースを龍牙先輩に手渡ししたよ！全然待たせてねえ！っ！かあなたついさつきまで何処にいたんですか！？少なくともこの妙に長いリムジンの最後列にはいませんでしたよね！？

「……私達は主人が呼べば、主人が何処にしようと思えば参上するようになつていきますので」

「はぁ……そうですか……」

この人、さりげなく俺の心を読まなかったか？

「気のせいです」

……。

やっぱり読んでたよ！

「……お前等が俺の知らないところで勝手に会話するのは構わないが、そろそろ下がってくれないか？メイド長。俺達は大事な話があるんだ」

「し、しかし龍牙様」

ん？なんか急にメイドさんが狼狽え始めたな。

「まだ、褒美をもらっていません……」

褒美！？メイドなのに主人にたかるの！？

「……………」

メイドさんの視線が突き刺さった。…とても、痛かった……。

「褒美か。……いいぞ。いつものことだしな。で、今回は何が欲しいんだ？」

龍牙先輩、随分軽く了承しましたね。つーかいつものことって……。  
…。

「…………あの…………写真を…………」

「写真？」

龍牙先輩が首を傾げる。

「はい……………」

「それは一体何の写真だ？準備できるのならするが……………」

「いえ、カメラはここにありますので…………後は、龍牙様と、そちらの……………」

そう言い、メイドさんがちらりとこちらの方を見る。

…………何故だろう？何かいやな視線だな…………。

「零斗がどうかしたのか？」

「はあ…………その、龍牙様と零斗様が二人写っている写真が何枚か欲しいのですが……………」

「俺と零斗のツーショット写真？そんなんでいいのか？」

「は、はい……………」

メイドさんがチラチラと龍牙先輩と俺を見る。

…………何だろうな。ついさっきから変な感じだ…………。

「俺は別に構わないが…………零斗は？」



「俺も別に構いませんよ、写真ぐらい」

何か嫌な予感がプンプンするが、このままでは話が進みそうにないので了承する。

「で、では、お二人共、こちらへ」

メイドさんが指差す。そこにはカーテンで仕切られた空間があった。車の中なのに……。

……っていうか、ついさっきからメイドさんの鼻息が少しばかり荒くなっているような気が……（しかし、女性にそんなことを言うものではない）。

「じゃ、ちゃっちゃんと終わらせて話に戻ろっぜ」

「そうですね」

俺達はその空間に足を踏み入れた。

・  
・  
・

「……………フッ、これから『自称』犯罪集団のアジトに乗り込むというのに、よくこんな下らんことを。……………まあ、それが貴様等の長所というものだろうがな」

月見里輝夜。貴様に最もかけている『物事を楽しむ』ということがな。

と、屍櫃は1人残された最後列でぽつりと、そう呟いたのであった。

## 7、潜入！艮山 1（前書き）

こんなことして良いのか、受験生！（おい）

## 7、潜入！艮山 1

「艮山森付近」

「これより艮山に潜入する。貴様等、準備はいいか？」  
と屍櫃。

「いいに決まってるだろ」  
と龍牙先輩。

「勿論だ」  
と俺。

「……………」今思うと物凄い集団だな。仮にも四大幻帝である俺と、その四大幻帝の頂点に君臨していると言っても過言ではない屍櫃。更に生徒会長であり、白黒グループの御曹司である龍牙先輩。常人なら裸足で逃げ出しそうだ。

「では、突入するぞ」

こうして、俺達は艮山の道がないところから潜入した。ちなみに、道路から潜入しないのは奇襲をしかけるためだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「……まったく、結局こうなるのか……」

今現在、俺は独りでアジト内を歩いている。  
そして遠くでは幾つもの爆発音が響いている。  
龍牙先輩、あなたは少し自重してください。

「いたぞ！侵入者だ！」

歩いている通路の先に黒い奴等が現れる。チツ、見つかったか。他の二人が騒いでいる間にささと天瀬親子を助けようとしていたが、見つかってしまった。

「仕方ない……。こういうのは馴れてないんだけどな……。  
ハアッ！」

剣を鞘から抜かないで居合いの構えをしながら、連中に突っ込んでいく。

相手は慌てて拳銃を撃ったが、急いで撃つたために見当外れのところに着弾する。

そして、居合いの真似をし（勿論、居合いなんかはできないので抜刀せずに鞘に入れたまま振り抜いた）、一番前にいた男の拳銃を弾き飛ばす。

同時に、振り抜いた剣をそのままの勢いで手を放し（剣を上に向けてたような形になる）、急いでポケットからゴーグルと耳栓とスタングレネード（龍牙先輩からもらった）を取り出し、ゴーグルと耳栓を装着してスタングレネードを投げる。

瞬間、スタングレネードが破裂し、辺り一面に爆音と閃光がほとばしる。

耳栓をしていても聞こえる音なので、音量は相当でかいものなのだろう。耳栓をしてなかったらショック死するぐらいに。



黒と赤が混じった小山の上に足を乗せながら、白黒龍牙はそう言った。

「くっ、こいつはヤバい！一時撤退だ！」

残った数人の中の一人がそう叫び、逃げる。  
他の者も、その一人を追うように逃げる。

「おっと、この俺が逃がすと思うか？…答えは否だ！」

その直後、そのやりとりがあつた場所で巨大な爆発が起こり、それが収まった後に立っていたのはたったの一人だけだった。

・ ・ ・

「随分と過激ね、あなたの仲間は」

「フツ、当たり前だろう。何せ『0』と『IV』だからな。全てを取り込む者と、全てを従える者に貴様の式程度が通用するわけなからう」

「言葉がすぎるわよ、死神。それじゃあまるで私の式が弱いみたいに聞こえるじゃない。それでも五つの内の一つを使っているのよ？」

「フン、それならば貴様が弱くなったのだろう。数字持ちだが、『何も知らない』二人に負けているということはつまり、そういうことだ」

「何を言っているのよ。いくら五宝の内の一つを使っていると言っても、入れている力が弱いんだから仕方ないじゃない。本気を出したらあの二人なんか簡単に捻り潰せるわよ」

「本気を出したらか……。見事に中二発言だな」

「でもそれは事実よ。敢えて本気を出さないのは、出したらこの物語がすぐに終わっちゃうから。それに、バッドエンドになるにしても、負けるべきはラスボス戦でしょ」

「フツ、貴様がそう言うのであれば好きにしろ。俺がとやかく言う資格はないからな」

「言われなくても端からそのつもりよ。……………それより、そろそろ行った方がいいんじゃない？あの二人もうすぐ『恋人』のところに着きそうよ」

「そうか。ならば行かせてもらおうとしよう。……………では、さらばだ。これからも精々頑張ることだな」

「……………余計なお世話よ、『数字を持たなき数持者<sup>ロストナンバー</sup>』。あなたも精々気をつけることね」



## 7、潜入！艮山 1（後書き）

受験勉強のため、更新が非常に遅くなります。今でも十分遅いですが、更に遅くなります。

## 8、潜入！艮山 2（前書き）

久々の更新

## 8、潜入！艮山 2

「ここは……………」

通路を走っていたら、開けた場所に出た。そして、いくつもの分かれ道がある。どうやら、ここがこの施設の中心らしい。多分、ここからならこの施設の何処にでも行けるようになっていたのだろう。それならば、天瀬親子がいる場所にもここから行ける筈だ。

「問題は、どの道を選べばいいのかだな……………」

道は俺が来た道を含めて八本。綺麗に八方向に拡がっている。この中に藍思達へと続く道が一つだけある。その道は俺が来た道を除いた七本の内の一本。つまり、七分の一の確率。パーセンテージにすると約14.3%だ。ん？待てよ……………？ここは巨大な施設だから絶対に管制室がある筈だ。管制室にはその施設の見取り図が必ずある。そうすれば藍思達の居場所が分からなくても、大方の居場所の見当はつく。そして、こういう施設に限って管制室の場所が分かりやすい。そこならばこの施設の地図も見れるんじゃないか？

「よし、それじゃまず管制室に向かうか」

管制室の場所は潜入する際に見かけたから分かる。

管制室は……………あっちだ！

「おつ、零斗じゃないか」

「あつ、龍牙先輩」

後ろから声がしたので、振り返ると、そこには血にまみれた（多分  
返り血）龍牙先輩が立っていた。普通なら驚くべき所だが、龍牙先  
輩が流血沙汰を起こすことなど日常茶飯事なので、今更驚くことは  
ない。……ていうか、大丈夫か？我等が生徒会長は……？

「つて、あれ……？」

「ん？どうした？零斗」

管制室への道つて、どの道だっけ……？

「何をボケツと突っ立っているのだ、二人共」

「うお！？……なんだ、屍櫃か……」

急に現れた死神に驚く。

……なんかこう言つと本物の死神が現れたみたいだな……どうでも  
いいけど。

「どうしたのだ？……まあ、どうせ天瀬親子の居場所が分からなくて  
途方に暮れていたただけだろうがな」

屍櫃の嫌味つたらしい言葉にムカついた。しかも当たっているから  
余計にだ。

「そう言うからには、勿論天瀬達の居場所を知ってるんだろ」

龍牙先輩が話題を変えるために口を挟む。この人も少し頭にきてい  
るのだろう。

「フン、愚問だな。知っているに決まっている」

「なら、こんな所で突っ立ってないでさっさと天瀬達の所へ案内しろ」

「フン、言われずともそうする。だが、天瀬親子の居場所が少しばかり厄介なのだ」

「厄介？」

鸚鵡返しに言う。厄介って、どういうことだ？

「二人の居場所が別れているのだ。しかも、互いの部屋が互いに確認できるようになっている」

「つまり、俺達が一方を助け出している間に、もう片方がまた遠い別な場所に移動させられてしまうということだな……………」

屍櫃の言葉を、龍牙先輩が言い直す。

……………なるほど、それは確かに厄介だな……………。

「その通りだ。故に、俺は作戦を立てた。二人共助け出す作戦をな」

ニヤリ、と屍櫃は得意気な顔でそう言った。

## 9、潜入！艮山 3

『こちらAチーム。聞こえるか、Bチーム』

「こちらBチーム。ああ、聞こえている」

『では、これより作戦を開始する。                   いくぞ、3・2・1、ミッ  
シヨンスタート』

・  
・  
・

「           分散して両方を同時に助ける？」

確かにそれが一番手っ取り早く助けられる方法だが、それには、両方をほぼ同時に攻めなければならない。しかし、携帯電話は圏外なので連絡を取り合う方法がないに等しい。それで同時に攻めるというのは、不可能に近い。

「そうだ。在り来たりな作戦だな」

「だが、それには1つ欠点があるな。連絡を取り合う手段がないことだ。どうやらジャミングを受けているみたいだぜ。携帯も持ってきたトランシーバーを使えない」

龍牙先輩が手に持っていたアタッシューケースを開けて、トランシーバーを取り出し、こちらに投げる。

「あつ、本当だ。通じない」

受け取ったトランシーバーを使用してみたが、通じなかった。

「ほら、この通りだ。どうやって連絡を取り合っただ、屍櫃？」

打つ手なし、という表情で龍牙先輩は屍櫃に問いかけた。

「フン、何を言っておるのだ？連絡手段なら、ここにあるだろう」

そう言っ取り出したのは龍牙先輩から受け取ったトランシーバーじゃない、もっと旧式のごついトランシーバーだった。

「なんだそりゃ？旧式のトランシーバーか？」

「ああ、そうだ」

「なんでまたそんな物を……」

「こいつは旧式とは言っても少し変わっていてな。今現在使われているような周波数とは少し違う周波数で会話ができるのだ」

まあ、少し雑音が酷いがな、と付け加えた。

「なるほど、それなら通話できるかもしれないな」

その周波数もジャミングされてなければの話だが。

「無論、これなら通話できるぞ」

というか、元からここで使われていた物を拝借しただけだがな、と屍櫃は付け加えた。

「本当に大丈夫なのか？盗聴の可能性は？」

龍牙先輩が念を押すように言う。

「ほぼ0と言っていいだろう。何せ管制室にいた連中を気絶させて縄で縛っておいたからな。これもその管制室で手に入れた物だ。それとこれを」

屍櫃が龍牙先輩に丸まった紙を渡す。

「それはこの見取り図だ。天瀬親子は印のついている所に捕らえられている。これを使えば辿り着けるぞ」

「流石は屍櫃といったところだな。じゃあ後は、それぞれ助けに行く組み合わせだが」

「それについても心配要らん。下上と白黒が組んで片方を、俺は1人でもう片方を助けに行く」

間髪を入れずに屍櫃が言う。

「何でだ？お前と下上がペアでいいじゃないか。ちょうど四大幻帝同士だし」

「駄目だ。俺には下上のお守りなどできんからな」

屍櫃は淡々とむかつくことを言う。



悪かったな！弱くてよ！

「だがしかし、貴様はその点問題なかるう？ なんとって皇帝なのだからな。民を守るのは必然であろう」

「あー、確かに。その分お前は一緒にいたくはない数字だし」

一緒にいたら逆に死に絶えそうだと龍牙先輩は付け加えて冗談を交えた。

「フン、そういうことだ。では、貴様等はこっちの方へ向かってくれ。俺はこちらに行く」

見取り図を指差しながらそれぞれの向かうべき場所を決める。

「OK、分かった。じゃ、いくぞ、零斗」

「はい、分かりました」

「フツ、朗報を期待しているぞ」

「こっちな」

こうして、天瀬親子を救出するために、俺等は二手に別れた。

・  
・  
・

そして、話は冒頭に戻る。

『こちらAチーム。聞こえるか、Bチーム』

「こちらBチーム。ああ、聞こえている」

トランシーバー越しに聞こえる屍櫃の声に、龍牙先輩が応える。

『では、これより作戦を開始する。      いくぞ、3・2・1、ミッシヨンスター』

そして、この声を合図に俺達は扉の前に立っている見張り番二人に襲い掛かる。

見張り番は突然の襲撃に驚き、隙ができたところをすかさず狙い（俺は突き、龍牙先輩は蹴りだ）、見張り番をぶちのめす。

「零斗！退いてろ！」

見張り番を倒した龍牙先輩が、今度は扉（金属製）に蹴りを喰らわす。

扉は龍牙先輩の蹴りの強さに耐えきれず、ひしゃげ、壁から離れ、床に伏す。

……相変わらずでたらめだなあ……。

「誰だ！お前達！」

中にいた三人の黒服の中の1人が声を上げ、一斉に銃をこちらに向ける。だが

「反応が遅すぎだぜ？」

龍牙先輩は既に1人の黒服の懷に潜り込んでおり、そのまま腹部に掌低突きを喰らわして吹き飛ばし、もう1人の黒服にぶつける。

「ば、馬鹿な……………」

残された1人はその光景に啞然と、呆然としている。

……隙だらけになっているところ悪いが、氣絶してもらおう。

足音をたてずに、黒服の背後に忍び寄り、刀（鞘に納めた状態）を振り上げ

「氣絶してろ！」

思い切り、叩き付けた。

・  
・  
・

「  
よーしよしよし。落ち着いたか？藍思？」

「  
うう……………グス……………」

ふるふる、と藍思は首を横に振り、俺に強くしがみついてくる。

……まあ仕方ないか。怖い思いをしたんだろうし。時たま聞こえる『グフフ』というこの場に相応しくないかつおおよそ女性が出すような声ではない笑い声は幻聴なのだろう。

そして、息を多少荒げながら、こつ、身体を擦り付けてこられると  
感じられてしまうのは、多分そう思ってしまう俺が悪いのだろう。

「  
ああ、こっちは片付いた。そっちもどうせもう終わってんだ

る？もうそろそろ脱出しようぜ？……………ああ、分かった。お前の言った通りにすればいいんだな？」

俺が藍思をあやしている間、龍牙先輩は藍思を縛っていた縄で倒した黒服三人を縛り付けた向こうで、トランシーバーを使って屍櫃と連絡をとっているようだ。

「零斗！天瀬！屍櫃からの伝令だ！脱出するぞ！」

こちらに向かって大声で言ってきた。屍櫃の方も終わったらしい。

「あう！」

「はい！分かりました！…ほら、藍思も自分で立つ！」

どさくさに顔を近付けてキスをしようとしていた藍思の額にデコピンを喰らわす。こいつ……………実は全然恐がっていなかったな……………。

「ううゝ、分かったよゝ」

目尻に涙を溜めながら承諾する。自業自得だ、ボケ。

「……………。（やれやれ、だな）」

「ん？どうしました？」

龍牙先輩の視線に気付き、訊ねる。

「いや、何でもないさ」

「？」

一体なんだったんだ？

・

・

・

・

・

「何だ貴様等。随分と遅かったではないか」

俺達は、藍思を連れて施設から抜け出し、屍櫃との合流地点に向かい、今漸く着いたところだが、そこにはもう屍櫃と、その傍らにおばさんがいた。

屍櫃の口振りからすると、結構前からここにいたようだ。

「お母さん！」

藍思は自分の母を顔を見て、声高らかに呼び、母の下に駆け寄る。

「藍思！無事だった？なんか酷いことされなかった？」

おばさんは母親らしく（本物の母親だから当たり前か）娘の心配をしているようだ。

「うっん、何もされなかったよ。お母さんは？」

藍思も藍思で母のことを心配しているようだ。

「私も大丈夫。両手両足を縛られて目隠しされたけど……」

「私もされた。全く、嫌になっちゃう。好きな人にSMプレイで縛られるんだったら大歓迎だけど。…ねっ！零斗」

「……その話の流れで何故俺に振るんだよ……」

この会話の流れから見ると、まるで俺がSMプレイの常習犯みたいじゃねえかよ。今までに一回もそんな経験……あ、一回だけやられたことがある。……いや、あれはカウントしない。しない筈だ。あれは半ば無理矢理だから。あの不吉がちょっと興味を示してマウスである俺が縛られたただだから。断じてSMプレイではない！

「えゝっ、だって零斗縛るの上手そうだし。というか、縛ってたじゃん」

「……………ハア!?」

何言ってるのこいつ!?

「えっ、零斗君、本当なの?」

おばさんが若干引き気味で問うてきた。

「断じて違います!縛ら　縛ったことなんて一度たりともありません!」

危ねえ、『縛られたことならまだしも』って言いそうになっちゃった。

「ええっ!? 陸のこと縛ってたじゃん! しかも言葉攻めしながら」

「してねえよ！しかも対象が女じゃなくて男ってどういうことだよ！」

それ全部お前の妄想じゃないの！？絶対腐ってるお前の脳味噌作の話だろ！

……あつ！おさんが白い目でこちらを見ながら徐々に遠ざかってる！

「…あつ、これは『愚教皇』の中での話だったっけ」

『愚教皇』って何！？

解説  
グキョウコウ  
愚教皇

夢占学園高等部の女子達で大人気の同人誌。主に零斗×陸の内容がかかっている。内容は勿論R指定。

「ごめん零斗。このことはまだ事実じゃなかったね」

「まだって何だよ！今後もねえよ！」

「いや、もしかしたらってことも……」

「ねえよ！」

あつてたまるか。男が男を縛るってどうよ？そんなの気持ち悪いとしか言いようがない。俺はノーマルなんだ。Sでもなければゲイでもない、ただ普通の性癖（そんなものが本当に存在するのか些か疑問だが、あつたと仮定する）の持ち主だ。そんなことに興味は湧か

ない。むしろ嫌悪感を抱くね！

……それと、屍櫃と龍牙先輩はニヤニヤしながらこっちの様子を観察しないで！おばさんは俺との距離を戻して！

・  
・  
・

「で、派手にここをぶっ壊しちゃったわけだが、どうする？」

唐突に龍牙先輩が口を開く。

いや、『どうする？』と言われても……………。

「フム、そうだな…………。ひとまず、天瀬親子を家へと送ろうではないか。話はその後だ」

「そうだな。…………藍思、おばさん。家へ送ります」

「迷惑をかけちゃったし悪いわ、そんなの」

おばさんが断りの言葉を放つ。

「いえいえ、天瀬さん。全然迷惑ではないですよ。むしろあなたみたいな美しい方をお送りすることができなんて男冥利に尽きます」

しかしそこは紳士的な言葉で返す。流石は龍牙先輩。三大財閥の御曹司をやっているだけのことはある。

「そ、そう…………？ならお願いしてもいいかしら……………？」



おっ、おばさんが口車（言い方が非常に悪いな）に乗りかけている。

「勿論です！」

ニツと、白い歯を輝かせて即答する。ホント、ホストみたいだなあ、龍牙先輩は。

ホストに貢ぐ女の人ってこんな感じに墜とされるんだろうなあ、と感じながら帰路についた。

・  
・  
・

「いくら手を抜いていたからって、こついとも容易く破られるとはね。今度はもう少し難しくした方がいいみたいね」

月見里輝夜も、帰り道を歩きながらそう独り言を小さく呟いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ピンポーン

「はいはい、今出ます。……あ、零斗君。おはよう」

「おはようございます。藍思は……起きてますか？」

答えは聞かずとも分かっているが、一応訊いておく。

「……いつも通り寝ているわ。ごめんなさいね、いつもいつも」

おばさんが我が娘ながら情けないという表情で答える。もう何度や  
ったか分からないやり取りだな、これは。

「いえ。これも幼馴染みの仕事ですから」

こらそこ。普通とは逆言うな。俺だってそういう夢を持っていたと  
きがあるんだ。だが、現実には甘くない。何が悲しくて変態の巣窟に  
週五でいかなきゃならんだ。

これだったらあの不吉の家に行った方がましだね。

……………。

いやマジすみませんでした！冗談でもこんなこと言つて！あそこ  
に行くぐらいだったら毎日起こしに来てもいい！いつそのこと襲わ  
れること覚悟で添い寝してもいい！

「あのー、零斗、君……………？」

「ハッ!？」

この前あったこと（実際は事実ではないが）で若干俺に引いている  
おばさんが遠慮がちに俺の名前を呼んだ。  
どうやらいつの間にかトリップしていたらしい。

「す、すみません。今すぐ藍思を起こしに行きますんで」

ここにすることがつらくなった俺は逃げに走った。

そして、その後言わずもがなな展開をやり過ごして、学校へと向か

った。

・ ・ ・

結局、この大騒動の発端は分からず仕舞いのまま終着した。天瀬親子も何故連れ去られたのか分からないらしい。ただ、突然現れて銃を突き付けられ、連れていかれたそうだ。やっぱり犯罪集団っていうぐらいだからこの美人親子に性的な暴力をするつもりだったのだろうか？しかし、それだったならば、何故拉致してすぐに犯さない？こういった組織の連中は基本的に短気な奴の集まりだから、拐ったらすぐにでも行為に及ぶだろう。

と、すると、何か別の目的があったのだろうか？

まあ、今となつては詮索することは不可能だから、深追いはやめておこう。

話は変わるが、その日の夜も明けかけた時に自宅の前に戻ってきたが、そこに割れた鉢がおいてあった。石製で、随分と古びたものが。最初は不法投棄かと思って捨てにいくこうとしたが、その時はまだ夜中、そうすると今度は俺が不法投棄をしたことになってしまうので次のゴミの日まで家に放置しておくことに決めた。

本当になんだろうな？この鉢………

## 9、潜入！艮山 3（後書き）

次回、新章突入です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7882j/>

---

アルカナスパイラル～天瀬藍思編～

2011年10月9日18時59分発行